

スポーツ有識者による^{ていだん}鼎談

(公財) 小田原市体育協会主催

日時 平成30年5月31日(木) 午後3時から午後5時まで

場所 小田原アリーナ 応接室

参加者 江島 紘 小田原市体育協会会長
鈴木 秀雄 関東学院大学名誉教授
水谷 尚人 (株)湘南ベルマーレ代表取締役



●レガシー (遺産)

(江島) 5年後、10年後のグラウンドデザイン

今年、サッカーのワールドカップがありますが、日本では来年のラグビーのワールドカップから2020年のオリンピック・パラリンピック、2021年のマスターズゲームと、ビッグゲームが続きます。加えて、神奈川県では2021年にねりんピックがあり、2020年のオリンピック・パラリンピックの年にミニ国体もあると聞いているので、いろいろな形でスポーツがこれから盛んになっていくと思います。

そこでレガシー(遺産)をどのような形で考えていくのか、ということですが、国は国、県は県のレガシーがあり、小田原市としては市民のためになるということを遺産にしていかなければなりません。

実際に市民のためになるということになると、スポーツだと運動を楽しみ、享受していくということ、それから休養を取って適切な栄養・食事を摂って健康で長生きしていくということが中心になるのかと思います。

今後、5年後、10年後のスポーツを中心としたグラウンドデザインというものをここで考えることによって、レガシーをどうしたらよいかという方向性が見えてくるのではないかと考え

たわけです。

そこで、グラウンドデザインをどのようにして考えていけばよいのかという話し合いをこれからスタートさせようということになります。

小田原市の市民の特色として、自分が関わることには手を出すのが、他人のすることには無関心という気風が多々あります。そのような人の条件、そして気風みたいなものに自然条件(環境)も含めた中で、レガシーをどう考えていこうかということが問題になってくるかと思えます。

また、このグラウンドデザインを考える時に、どのような内容のものをこれから話し合っていけばよいのか、その方法論をどうしていこうかということがあります。

グラウンドデザインを描くだけでは意味がありません。描いたグラウンドデザインをどう実践していくのかということがむしろ大事になってくると思います。そのための組織はどうあるべきか、そして一番問題になる資金をどう準備していくかについても問題になると思います。

(水谷) ゴールや成功の基準を

私は2002年のサッカーワールドカップ組織委員会でチケットの担当でした。2002年の

ワールドカップというのは何となく盛り上がって大成功と言われていたのですが、その時に、ゴールというか、こうなったら成功だよ、という基準がなかったように思います。

盛り上がって成功だとメディアは言うと思いますが、お客さんが何人以上入ったとか、いくら以上儲かったからそれで基金ができるから使うといった、ゴールがあっというと思います。それが成功か失敗かの基準になります。

(江島) 指導者の考え方を変えていくには

スポーツ推進委員や各種目の指導者がいますが、いろいろな形で本人もスポーツをやってきた、運動をやってきたという人が多いので、過去の本人の経験を大事にし過ぎて、新しい考え方とか、もっとこのようにしていった方がよいといった考えがなかなか出てきません。指導者の資質向上をどうしていくのか、考え方を変えていくのにはどうしたらよいのかも課題として出てくるわけです。



江島 紘 会長

部活動をどうするかについても大きな課題です。30年、40年も前の先生は自分も部活動指導をしたくて、子どもと一緒にやっていました。ところが今の先生は、ややもすると、これをやれと言われてやっている場合が散見されるので、子どももやっていて楽しくありません。そういうことも含めて、かなりの課題があるので、そ

れを払拭しながら新しいグランドデザイン、新しいモデルケースをどう作っていくかという非常に大きな夢があります。ですから、ここがゴールだというゴールを描きにくいことは事実なのですが、5年後、10年後にこうなるであろうというゴールは描けるかと思っています。

(鈴木) 課題を払拭することがゴール

ゴールは、今の課題を払拭するということだと思います。問題を抱えているが、その問題を解決する方向、方法を持っていません。我々が学生の時は、部活の担当をしたいから教員になりたいという人がいました。しかしながら、学校教育のシステムが変わったので、教員が可哀想です。

(鈴木) 「未来遺産」は今から作る

レガシーという言葉が私が所属している学会では、「未来遺産」と表現しています。未来遺産というのは今から作らないと未来遺産になりません。オリンピックレガシーと言うとオリンピックで何が残ったかということですが、未来遺産は今から作るという形なのです。

(水谷) レガシーは「人」、選手を発信、運営経験

ベルマーレの社長になるにあたり 2020年の東京オリンピック・パラリンピックを絶対に利用しなくてはいけないと思っています。私は、レガシーは「人」だと思っています。そこでひとつは選手です。私たちのスポーツクラブにはビーチバレーやトライアスロンでオリンピックを目指している人もいますし、サッカーでもいます。この人たちが東京オリンピックを目指してやっているという姿を発信して、地域の人たちと触れ合って、その過程を見てもらいます。そして、この選手たちが活躍したらすごく嬉し

くて盛り上がると思います。でも一番重要なのは、選手たちが戻ってきて、オリンピックってこうだったよと地域の人たちに伝えること、これがレガシーとして繋がっていくと思っています。

また、国際大会の運営というのはよい経験になると思います。2002年のサッカーワールドカップの例で言うと、平塚市がナイジェリアのキャンプを誘致したときの経験が、平塚の人たちにとってすごく大きいと感じています。それを形にして発信していけば、レガシーのひとつになると思います。

(鈴木) 市民がラグビーを知る、みる

6億円かけて城山陸上競技場を改修しましたが、そこにラグビーがどう来るかということを市民がわかっていないといけません。また、市は市民にこのことを早く知らせないといけません。

小田原市民は、本物のラグビーの試合を見る機会があまりないように思います。ですので、練習などの露出度を高めるだけでも盛り上がるのではないのでしょうか。

トレーニングは秘密にやらなければいけない部分とオープンにできる部分があるはず。オープンにできる時に、閑散とした状態であるのと、そこに異国への関心を持った人がいるのとでは国際交流の視点からも随分違うと思います。



改修後の城山陸上競技場

(水谷) 選手だけでなく運営スタッフと触れ合う

そう簡単にはトップアスリートとは触れ合えないと思います。彼らは勝つために来ているので、そこを理解しないと、お互いに何だよということになってしまいます。

選手と触れ合うのは難しいのですが、サッカーでは例えば代表23人の選手が来るとコーチ陣が10人程付いて来ます。それ以外にワールドカップともなると、運営スタッフや協会の人々が15人くらい来ます。この人たちがチームを動かすのですが、この人たちとの触れ合いなら可能です。フランス語、英語、ドイツ語などで会話が普通にできたら面白いですね。サッカーも、他のスポーツもそうですが、試合をするのは選手ですが、その全部の準備は周りの人たちがやります。その人たちとの触れ合いということにも、十分に価値があると思います。

(江島) 市民がラグビーに関わる

2019年に開催されるラグビーワールドカップのキャンプでオーストラリアの代表チームが小田原に来ますが、実際に市民が一人でも多く関わるのが大切だと思います。話をしてもよいですし、試合を見に行っても、練習を見に行ってもいいです。いかに関わったかということが一番のレガシーだと思います。

多くの市民はラグビーをあまりよく知らないのではないのでしょうか。ラグビーを知ることによって、面白そうだという気持ちが持てるだけでも一つのレガシーだと思います。お手伝いしても関わったという人をいかに多くするのかということだろうと思っています。オープン練習を市民がみんなで見に行き、すごいと言ったって、それもひとつのレガシーになると思います。

(水谷) 子どもたちに選手の凄さを見せる

せつくなので、今年の夏休みの宿題を、小中学生は全部ラグビーについてやらせてはいかがですか。また、オーストラリア代表チームのキャンプ期間中は学校を休みにしてはどうでしょうか。

2メートルもある身長の人が100メートルを11秒台で走ることはすごいことです。スクラムとかを見て、選手の体から湯気が上がっているのを見ると本当にびっくりします。その時に感想でも何でも残しておけば、それがレガシーだと思います。

(鈴木) アスリートの立ち居振る舞いを見せる

小学校や中学校の子どもたちをオーストラリア代表チームのキャンプに招待するとよいのではないですか。

子どもたちに、トップアスリートの立ち居振る舞いを直接見せるということです。小学校とスケジュールが合うかわかりませんが、それは調整すればよいことだと思います。

基礎的なトレーニングであれば何も秘密にするわけではないので、オーストラリア代表チームにも要望すればよいのです。それを子どもたちに見させてくれということだったら、向こうはノーとは言わないのではないのでしょうか。



鈴木 秀雄 名誉教授

(水谷) 日本人が他国の人に要望する習慣を

要望するという習慣が日本人に生まれることもレガシーだと思います。まず相手はこちらのことを思って話さないですから。駄目でも、向こうはこの日は無理だからと普通に答えると思うので、突っ込むとよいと思います。

●地域のスポーツクラブ

(鈴木) コミュニティ・文化スポーツクラブを

オリンピックのボランティアでも、交通費や宿泊費は自分で負担となると、お金がある人がボランティアをすることができ、時間はあってもお金がない人はできません。ボランティアというのは本来、全部自分で賄うのではなくて、本人が経費を使わずエネルギーだけを出すようにしないと、日本のボランティアはこれから行き詰まると思います。また、小田原の多くの市民は、仕事や家事が忙しいと言って、そこまで時間をかけてスポーツができないという部分もあるでしょう。

国のスポーツ振興基本計画では、スポーツ実施率が当初38.2%だったものを44%にしようと言いましたが、この実施率がなかなか上がりませんでした。スポーツや運動をやっている人は、体を壊すくらい一日何千、何万歩歩くとやっていますが、やっていない人は全くやっていません。

文部科学省の総合型地域スポーツクラブもドイツを真似しようとしています。うまくいっているとは思いません。本来は総合型地域スポーツクラブだからクラブに所属しますが、今はチームに所属しています。サッカーチームに入る、野球チームに入るということで総合型にはなっていません。形態としては多種目、多世代でやっているから総合型と言っていますが、個人の立場に立った総合型地域スポーツクラブに

はなっていないと思います。

今の総合型地域スポーツクラブは、自分たちの場所もなければ、あるいはどこかを借りて、自分たちのグラウンドを持っているわけではないので、ドイツのスポーツクラブとは全く違います。

では、スポーツ実施率を上げるにはどうしたらよいか。地域にある大きなスポーツの推進をしているところに力を借りるとするのは絶対大事だと思います。小田原市は26地区に分かれ、各地区からスポーツ推進委員も出ているので、地域スポーツを新しい名前でコミュニティスポーツと変えた方がいいと思います。

コミュニティ・文化スポーツクラブのようなものを26地区に、行政、民間、企業、自治会などが集まって、各地区の特色を生かした形態で創り上げていき、スポーツ祭やスポーツ縁日を実施してみたいかでしょうか。そこに行ってみたいと思うような、例えば有名選手に来てもらうとか、サイン会をやってもらうとか、おじいちゃんが孫を連れてきて選手にサインをしてもらうとか、地域に密着したことをやりながら、プロの方からも協力してもらうというようなことをやらないといけません。

多角的な考え方がお年寄りの問題にも対応するということであり、中高年の問題であり、青少年の無非行化、加えて町の安全につながります。子どもたちが運動か勉強かに分かれていますので、小さい時には、ひとつのスポーツだけ、あるいは勉強だけをするのではなく、いろいろなことをやって自分は将来、どんなことが好きなのか、どのようなスポーツ・文化活動が合っているのかといったことも含めて取り組んでいくことが必要ではないかと思います。



キッズマラソン(体育協会主催・小田原アリーナ)では様々なスポーツを体験

(水谷) クラブの活動場所として学校の活用を

湘南ベルマーレも総合型地域スポーツクラブにはなっていますが、最大の弱点は場所がないことです。場所があったら、学校や会社が終わったら、みんな集まってそこへ行こうということになります。完全な総合型のスポーツクラブであれば、「野球やる？水泳やる？」などと、そのときどきで好きなスポーツを楽しむことができます。ベルマーレはトライアスロンもビーチバレーもやっていますが、練習会場がバラバラになっているので、特定の種目を楽しむようになっています。その課題を解決できるのが私は学校だと思っています。場所としての学校です。

その学校ですが、平塚市は15の中学校があって、男子のバレーボール部は3チームしかなく、その理由の一つとして指導者の問題があります。それを知った時に、ベルマーレはビーチバレーもやっているのだから、指導者などのお手伝いができると思いました。また、その代わりに、例えば土日とか、水曜日の夜だけとか、学校を4時以降はベルマーレに貸してください、ベルマーレが使わせてくださいということができないかと考えています。場所の問題が一番大きいと思います。

(鈴木) 小学校をクラブの活動場所に

総合型地域スポーツクラブが中学校区を目安にしたわけですが、中学校区というのは広すぎて、やはり小学校単位あたりでいかないといけません。

小田原市には小学校が25校あるとすると、だいたい各地区にひとつあるということだと思いますので、そこは総合型地域スポーツクラブの拠点となる場所としては狙い目だと思います。その時に学校開放がどうなるか、そこに中学校をどう絡ませるのか考えていかなければなりません。

(水谷) 運営する壮年層の活性化を

先ほど、鈴木先生が、今のスポーツでのターゲットは壮年層と言われました。一方、江島会長が作っていただいた資料にいろいろな指導者がありましたが、多分壮年の人は少ないと思います。運動する層もそうですし、教える側、組織を運営する側に40代50代の方々が絡まってこないと活性化はしないと思います。どうしても時間のある人、運動する人は年齢の高い人と低い人になってしまうので、壮年層を巻き込まないと、まちの活性化には繋がらないと思います。



水谷 尚人 代表取締役

(鈴木) 誰もが運動ができるパブを学校に

それは市民が運動できるようにするにはどうしたらよいかということに近いところで、子育ても大変な時期に、子どもの面倒も見てくれて、親は自分のストレス発散で、なおかつ健康に役立つ運動ができるということです。その時にコーヒー1杯でも飲めるところがあるのがイギリス型のパブだと思うのですが、小田原市でも学校の空き教室などを使って、ちょっとしたカウンター（喫茶）でも作ればうまくいくのではないのでしょうか。あとは、それをやれるかやれないか、実行するかしないかの問題です。

(江島) 学校同士の交流と学校の規制緩和を

学校だけでひとつの世界を作り、他のところは他のところで作ってしまいます。交流がありません。だからその学校なら学校で、ひとつの法的な縛りがたくさんできてしまって、何かにつけ「そんなことはできない」で終わってしまうということが非常に多かったように思います。しかし、それでは今の世の中やっていけないと思います。

では、その辺の法的な縛り（壁）をどのように排除し越えていったらよいのかということを考えていかなければならないと思っています。

●部活動と地域スポーツ

(鈴木) 部活動の指導等を地域スポーツクラブに

部活動が学校の先生方の負担になっています。

これからは先生方の負担を軽減していくというよい意味で、部活動指導者を地域のスポーツクラブに要請するよう考えていくべきです。

そこが、部活もやるし、いろいろな総合型とか地域の文化スポーツクラブみたいなこととして、その地域の人たち全体に網がかかっているようにすればよいと思います。一部の人

が会員になっているところに税金は出せません。しかし、地域の全員に網がかかっているのであれば行政もそこに税金が投入できます。そのような仕掛けを作らないと、行政が関わっていく意味がないと思います。

(水谷) 部活動の指導者は外部の力を借りる

部活動にしても、言われて嫌々やらされている先生の所でやっている子どもたちは可哀想ですし、その先生も大変だと思います。

部活動をやることによって本来の授業で教えることとは違う学びを、自分が得ているし充実しているという先生がいらっしゃるということが本当はよいと思いますが、今はそうってはいないので、学校の外部の力を借りるのは絶対必要だと思います。

サッカーの事例で言うと、サッカーをやっている中学生が 100 人いるとすると、Jリーグクラブや民間でやっているのはそのうちの 1% です。全国で見た場合、ほとんど部活動です。それを考えた時に、日本におけるスポーツがよりよくなっていくために、部活動抜きには語れないと思います。

(江島) 学校をスポーツ活動や文化活動の場に

新玉小学校、新玉地区でいわゆる健民祭のスポーツフェスティバルが学校行事の一環になっています。地域の人たち、学校、先生、すべてがそれに関わって、子どもたち、地域の親、高齢者も参加しています。今まで 28 年間やってきましたが、それを今年でやめるというのです。逆に今こそこのような活動が地域ぐるみで展開されることが必要でしょう。もっと地域が学校に協力して、先生方もそれほど負担にならなくできるのではないかと考えていますが、学校の方針、地域の方針でやめるということになった

ら仕方ありませんが、そういう優れたものがあるにも関わらず、それが駄目になるというのは、学校の教育課程そのものが変わったということで、学校が負担になったようです。学校の先生そのものも日々の授業に追われて、そこまで手が回りません。また、労働基準法の問題があって、法を逸脱すると学校がブラック企業となってますます駄目になってしまいます。

それから学校開放も、非常に中途半端なものになってしまっています。その辺をどのような形でやっていけば、学校は本当に地域の人たちのスポーツ活動の場や文化活動の場となっていくかということを、考えていく時代になってきたのかと思っています。

(鈴木) 部活動とクラブを整理して考える

部活動と総合型地域スポーツクラブを一体化して考える方がよいと思います。スポーツはもともとアマチュアで始まり、それを職にするのはなかなか難しく、解説者とかになる人もごくわずかの人数です。それを考えると、今回の部活をどうするかという問題と、総合型地域スポーツの考え方をもう少し整理すべきです。スポーツクラブマネージャーを活動場所がないのに養成しても、何になるのかとなってしまいます。資格の値打ちと流通度が高くなければ、そこにより人材など来るはずはありません。

(江島) 選手と部活動指導者の課題

ベルマーレのフットサルクラブが小田原市にあります。その選手たちも何人かは小田原市の企業で働いています。スポーツをしている選手たちが辞めた後どうするかということは難しい問題です。市としてどのような形で、そのような選手たちも含め、生活ができて、しかもスポーツが楽しくて仕方がないようにできないも

のかと思っています。



湘南ベルマーレフットサルクラブの試合(小田原アリーナ)

また、部活動についても非常に難しい点があると思っています。先生方は午後5時まで学校の教諭をやっていますが、それ以降そういうものに関わると、ある程度の時間でお金をいくら出しますというのがあれば、また違った面が出てくるだろうと思います。あくまでも部活動が学校教育の一環だと言っていると、やはりうまくいかないと思います。

●活動場所と資金

(鈴木) 官学共同と企業協力

関東学院大学の体育館を使っていないなら、地域でネットワークを作りコミュニティ文化スポーツ教室として使用できるよう要望してみたいかがでしょう。

ひとつのモデル地区として、官学共同のパターンとかで手を付けられるところをグランドデザインの中のひとつとしてスタートしてしまうということが大事だと思います。

最初に管理資金のことを考えたら無理です。システムを作ってお金を捻出するしかありません。お金の捻出で、企業も協力してくれるところがあります。例えば、ひとつの企業ではなく、地域のライオンズ等にも頼んではいかがでしょう。大学も地域貢献として協力してくれるはずです。

(水谷) 理念に共感すれば企業も協力する

スポーツの広告効果にお金を出す人たちが減ってきています。一方で、地域のためとか人のためという理念に共感するところにお金を払うという企業が増えていきます。それを説明できると、資金を出すというところがあると思います。

(鈴木) 企業の体育館等の活用を

スポーツをする場所がないと言われているが、小田原市にも相当企業があるので、体育館などの施設を有する企業からは、施設の市民開放をしてもらうことを考えた方がよいですね。企業に対して税制優遇も考えることもよいでしょう。

(江島) 企業協力の発信を

スポーツ活動の場所を確保しようとするとき、今までは、市にお金を出してくれということが先行してしまいました。そうすると、市はお金を出しません。

市体育協会も広報に力を入れていますが、その広報の中で、この企業はこういう形で協力してもらっていますということを発信することが大事だと思います。そうするとある程度のお金は出してくれます。

やはり今までのように行政にお金を出してと言っても無理な話です。



体育協会の広報誌「スポーツおだわら」

(鈴木) 税金と受益者負担

本当は市もお金を出さないといけません。だから一部の人がというよりも、小田原市内全ての26地区でやるということであれば、市もある程度のお金は出してくれるはずです。そのときに受益者負担というようなことも組み込んでやればよいのです。

(水谷) 資金調達には成果報酬型を

ライザップが面白い取り組みを始めています。健康増進プログラムを長野県伊那市と提携しているのですが、成果報酬型なのです。保険診療費の減額分の半分の金額をライザップが報酬として受け取るのです。その成果報酬型というモデルは、小田原市が市内にある関東学院大学のスポーツ施設を借りる時に、市がお金を出す理由になると思います。これで健康づくりができて、みんなが元気に、健康になったら保険診療が減るわけですから、そのような口説き方があるかもしれません。

(鈴木) 企業だけでなく大学の体育館等の活用も

企業の体育館も利用価値があると思います。企業の体育館でも、昼間から従業員が使用するわけではなく、使用しても昼休みでしょう。企業が体育館をどれくらい持っているのか調査をしないとといけません。

小田原市内の関東学院大学には体育館以外にグラウンドもあり、ソフトボールができます。正規のコートサイズは取れませんがサッカーもできます。体育館も人が使えば傷みが出ますが、使わない傷みよりもひどくはありません。

(水谷) 既存施設の活用には規制緩和を

施設については、新しい施設を作るということでなく、既存のものを使うということによい

と思います。ただ既存施設には規制がかかっており、そのままではうまく利用できないこともあります。しかし、規制緩和はお金をかけなくてもできます。



小田原市総合体育館 小田原アリーナ

(江島) 学校施設活用のため文化をどう壊すか

学校でも体育館の中にシャワーを持っているところがありますが、こうしたものを日本人は、自分のものにしたり、他の者を排除してしまいたいと思います。外国では運動着や用具を借り、体育館には必ずリネン室、洗濯場があって、運動をすると全部その場で完結します。または先ほどのようにバーがあって、ちょっと飲めるような施設がありますが、日本の場合はありません。

自分のものにしたいという文化をどう壊すかは、大事なことだと思います。今、学校を使っている者も、自分たちが使っているのに、それを壊してもう1回となると必ず自分たちのものだと文句が出ます。だからそこをどう壊すのか、難しいことだと思っています。

●子どものスポーツ

(水谷) 子どもの偏ったスポーツ

湘南ベルマーレのサッカー選手にもキャッチボールが苦手な子がいます。

(江島) 子どもは多種多様なスポーツを

小学校の頃から、サッカーならサッカーしかやっていません。野球なら野球しかやっていません。やはり中学生になるまでは、いろいろな活動をやっておいた方がいいのです。

(鈴木) 子どもに必要なスポーツ

小さい時代から、陸上、サッカー、体操、水泳、ダンスをするというのは絶対必要です。陸上をやり、自分の体を操る体操を、足を十分に使うサッカーを、自分の体を守る水泳を、自分を表現するダンスをするのです。男性でもダンスをするようになってきました。

(水谷) 子どもたちが自由に種目を選べるように

ドイツの事例では、スポーツクラブに行き、今日は何をしようかと選べます。

日本の場合は、各種目の指導者間で子どもたちを取った・取られたの状況があるとも聞きます、残念なことです。

(江島) 子どものスポーツのシーズン制を

小田原市だけではできないというのがあるのですが、私たちも子どものスポーツのシーズン制を提唱してきました。例えば、春は走ること、夏是水泳、秋はボール運動をやってみようといったシーズン制をずっと言ってきました。ひとつのことに凝り固まったら、それだけとなってしまいます。

本来ではスポーツ少年団や広域スポーツクラブはそれをやるために設置したはずです。



外遊び教室(体育協会主催・城山陸上競技場)

(水谷) 多種目を行うには場所と工夫が必要

ベルマーレのスポーツクラブも完全に種目ごとです。理由は場が無いからです。無理やり何

回か取り組んだのは、所属している子どもたちにグラウンド一面使って、今日はここでは野球、ここではサッカー、ここではバレー、ここではトライアスロンと、それぞれの競技を回してしまふものでした。

(鈴木) 陸上・サッカー・体操・水泳・ダンスは幼少期に

種目に偏らずに、先ほどの5種目くらいは幼少期の頃に体験しておかなければなりません。自分の体を守る意味でもです。そのうち自分に合っているなという種目も見えてきます。

●指導者

(鈴木) 指導者は簡単なアドバイスを

余暇を楽しむのであれば指導者はいりません。指導者というよりは、「スポーツ活動において、ここをこうすると上手くいくよ」と、解き明かしをしてくれるコーチがいるとよいと思います。

(江島) 指導者は見守りだけでも十分

私の言っている指導者は、要するに、スポーツを楽しんでいる子どもたちを安全に見守っていればよいという指導者です。

誰が指導者になるかは難しいのですが、各地域にスポーツ推進委員がいるので、スポーツ推進委員に「1週間に1回だけ頼む」と言えばやってくれるだろうと思っています。

ただ、ここで特定の種目を指導するのだということになってしまう可能性もあるので、そこをどのように考えるのかだと思っています。

(水谷) 効果的な動きを自分で考える

子どもたちが勝手に指導者を探します。サッカーの場合、日本人はこうやって踏み込んで、こうやって蹴ると教えますが、ジーコと話した時にそんなこと教わったことがないと言ってい

ました。その代わりに、100回蹴ったら100回当たるときに自分の足がどうなっているか自分で考えたと言っていました。子どもたちには自由にやらせた方が、どうやって体を動かせば効果的に動くかと自分で考えます。

●産官学連携

(水谷) クラブと大学との提携と複合的な取組

実態として、産官学で動いているスポーツの事例はあまりありません。

湘南ベルマーレと産業能率大学は提携関係にあり、私らも大学の客員教授になって授業をしたり、インターンシップを受け入れたり、サッカー部を強くする指導者を派遣するなど、複合的な取組を継続しています。

(鈴木) まずは官学で連携を

産官学連携について、官学は市長と学長で覚え書きを作り、学長は理事会には報告すればよいだけのことで、難しくありません。

だから、最初に産が入らず官学だけの連携を進めてもよいと思います。

体育館などの施設を地域住民に開放し社会貢献をするということを大学も求めています。

(水谷) キーワードは「地域貢献」

「地域貢献」は企業等との連携においては、キーワードですね。

●コミュニティスポーツ

(鈴木) スポーツクラブを26地区に作る

子どもたちの健康とかお年寄りの健康とかを考えると、健康としての運動と楽しみとしてのスポーツをどう融合するか、お孫さんが出てくる時にはお年寄りも出てくるとか、そういうことも含めて小学校区で考えるというのはよいの

ではないでしょうか。

総合型地域スポーツクラブは中学校区単位での発想でした。受益者負担で会費を取り、やりたい人が来ているだけで、新しくスポーツをやってみようと思う人を巻き込めないで、地域コミュニティは活性化しません。

小田原市はコミュニティ文化スポーツクラブみたいなものを26地区に作るくらいのつもりでやられたらよいのではないかと思います。

(水谷) 小田原市民の盛り上がり

小田原市民の行動としてなかなか燃え上がらないとのことでしたが意外でした。そんな感じなのですか？

(江島) 周りの人たちのことは関心がない

例えばフットサルなら、フットサルに関わっている人たちは非常に熱心なのですが、その関わっている人たちの周りの人たちはほとんど関心がなく目を向けてきません。だから、フットサルなどで、今度試合があるからとベルマーレの選手が駅でチラシを配っていますが、そういう中でも、「がんばれよ」とか声は絶対にかけません。冷静、逆に言えば冷たい感じでなかなか盛り上がりません。

また、北條五代まつりにしても、それに関わっている人たちはよいのですが、そうでない市民というのは、みんなと一緒にやっていきません。だからツデーマーチなどもそうですが、それに関わった人たちは面白いので一生懸命にやるのですが、一般市民は歩くのにお金を出すのかという感じで、非常に冷たい感じを受けます。市民そのものを盛り上げていくのは非常に難しいのです。



城下町おだわらツアーテーマーチ(小田原市ほか主催)

(水谷) 小田原市民を盛り上げるには

関わってくれている人が関わってくれる人を増やしていくのが一番よいでしょうか。

(江島) 小田原市民を盛り上げるには

こんなことがあるから一緒に行こうよ、というような感じで進めていかないと、上手くいかないのだろうと思っています。

(鈴木) 小田原市民が盛り上がるには

自分も遅れてはいけないと思わせないとけません。関係ないことをやっていると思ったら、ずっとそう思い続けるでしょう。周囲の人は自分の健康とか、家族とか、地域に関係して何かやっているけれど、自分もやらなくていいのかと、そういう思いを作っていくということが大事かと思っています。

また、ある特定のところのひとつの地域でやるのではなく、みんないろいろなところで始めて、それで対抗ではなくて、お互いがよくなる競争意識で頑張らないと盛り上がらないと思います。

地区から出てきているスポーツ推進委員が中心になって、「地域の中心的な人材を集め10人くらいの会議をしましょう」くらいのことをや

られたらどうかと思います。小学校の教員や地域の自治会の人も入れたりとかして、協議会みたいなものを作ればよいのではないのでしょうか。

(江島) バーのようなコミュニティを

週に1回くらい運動をして、そのあとで一杯飲めるくらいでないとコミュニティにならないように思います。学校の体育館でバーみたいな形ができるとよいのですが、日本の学校ではそこまでいきません。ちょっと体を動かしたらみんなと一杯飲んでいるようなコミュニティをどう作るか、そういう中で運動をどうやっていくか考える必要があると思います。

(水谷) 誰でも入れる楽しい集まりを

P T Aの役員をやっていたとき、町の会議にも参加しなければならなかったのですが、そこに参加している多くの人が、会議後の宴会が楽しくて集まっているように感じてました。同い年くらいの人が20人くらい集まっているので、これは広げた方がいいなと思っているのですが、先ほど言われたように、入った人はよいのだけれど、入っていない人は全く関心がありません。

(鈴木) スポーツを柔らかく捉える

そこに技術論とか体力論とかが先に出てしまうと駄目なので、そこに行ってちょっと見るだけでもいいし、気が向いたらやるということでもいいので、「動かそう あなたの体 スポーツで」とスポーツを柔らかく捉えることがすごく大事です。

地域でできることは何かという、コミュニティの材料を生かしてやっていくということが必要ではないかと思っています。